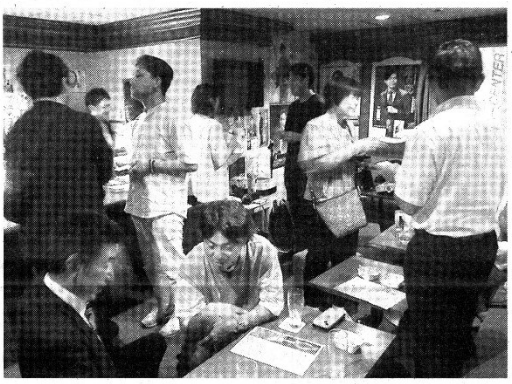
専門職ら歓談「Ｆｕｋｕｓｈｉ Ｂａｒ」

気軽「飲み会」雰囲気で連携づくり

□札　幌□

介護、医療、障害の枠を超えて広く福祉に関わる人が交流する、「Ｆｕｋｕｓｈｉ Ｂａｒ（福祉バー）」が札幌市内で定期的に開催されている。交流会は研修や事例検討会などの後に行われるのが通例。福祉バーは勉強会を伴わない「純粋な飲み会」だ。福祉に従事しているのを共通点に集った客が交流し、情報交換、連携の生まれることで人材確保、新規事業参入といった展開が生まれるなど効果を生んでいる。



名刺交換する参加者

福祉バーは同市中央区のスナックを貸し切りにし、月1回程度開催。参加者は高齢福祉だけでなく、訪問看護、薬局、障害福祉サービス、放課後等デイ、訪問マッサージなど多岐にわたる。

8月末の福祉バーには、約20人が参加。店内では初対面の人同士が名刺交換し、飲み物を片手に自身の業務内容紹介や、事業所・施設運営に関して会話した。

「常連」の障害者訪問介護を担うリガーレ・佐藤昭平代表は「いろいろな分野の人の話を聞けて勉強になる。ここでのつながりから仕事を頂けた」と振り返る。初参加した介護関連企業に勤める男性は「7月に転職したが、福祉の知識が無く学びたいと思った。雰囲気がとても良い」と楽しんでいた。

懇談でお互いの仕事について情報交換

福祉バーは福祉関連イベント、チャリティ事業などに取り組む、同市の一般社団法人ｆａｎｆａｒｅ理事・中村健太さんが個人で主催。知人への声掛けから始まり、２０２３年から本格化。口コミで広がり、これまでに延べ約４００人が参加した。

「福祉は、横のつながりがないことも多い。新たな福祉分野で事業をやりたいと思った時、つながりがあれば情報交換でき、広がりも生まれる」と中村さん。事業所の人材確保や、不動産業に勤めていた人がノウハウを得て認知症デイサービス開設など、効果が生まれている。

同市内通所介護事業所で管理者を務めた経験のある中村さんは「現在の職場を辞めたとしても、福祉業界から人がいなくなるのが嫌だった。高齢者福祉から児童、障害などに移行、福祉分野から離れないようにしたい」と展望している。